

## 3.3.7 波板ぶき

## (1) 標準構法

波板ぶきの標準構法は、図3.3.20及び以下によるものとする。

- i) 固定ボルトは、M6とする。
- ii) 固定ボルトは均等に配置し、ピッチは3山以下とする。

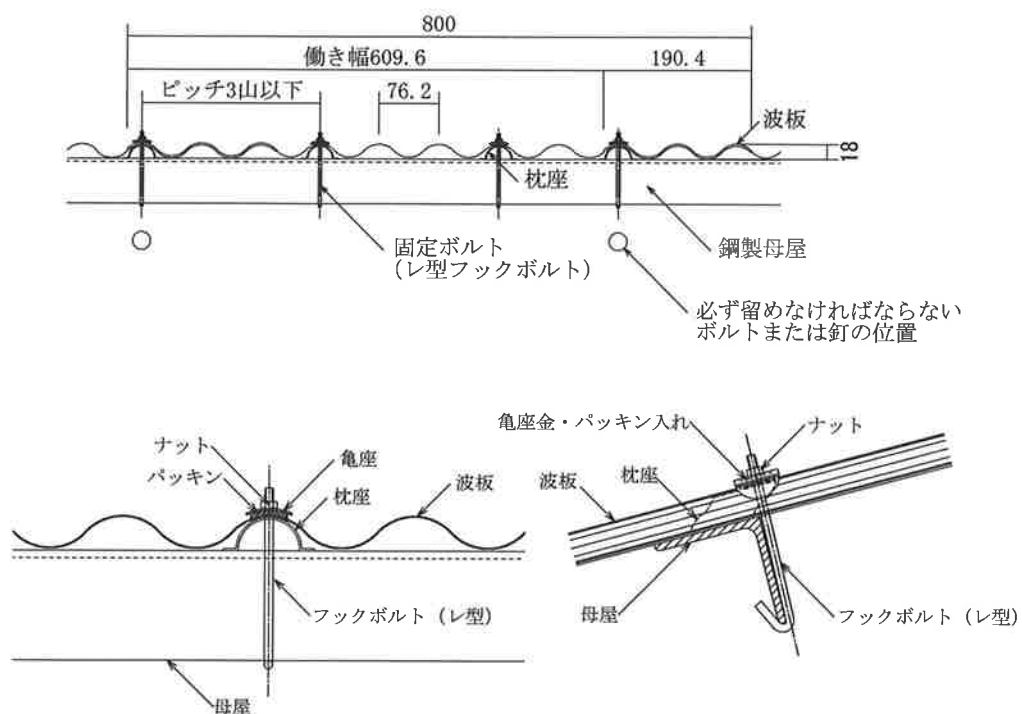


図 3.3.20 波板ぶきの標準構法

## (2) 標準仕様

波板の板厚、母屋間隔、固定ボルト数及び軒出の長さは、荷重の大きさに応じて表 3.3.14 から定めるものとする。

表 3.3.14 波板ぶきの標準仕様

荷重 N/m <sup>2</sup> (Kg/m <sup>2</sup> )	板厚 (mm)	必要固定ボルト数 (本/m <sup>2</sup> )	許容母屋間隔 (mm)	軒出の許容長さ (mm)
±882 (±90)	0.35	5.5	910	450
	0.4			
	0.5			
±1176 (±120)	0.35	5.5	910	400
	0.4			450
	0.5			350
±1470 (±150)	0.35	5.5	910	400
	0.4			350
	0.5			400
±1764 (±180)	0.35	5.5	910	350
	0.4			400
	0.5			350
±2058 (±210)	0.35	5.5	910	300
	0.4			350
	0.5			300
±2352 (±240)	0.35	6.0	860	300
	0.4		890	
	0.5		910	
±2646 (±270)	0.35	6.8	820	250
	0.4		850	300
	0.5		910	300
±2940 (±300)	0.35	7.5	780	250
	0.4		820	300
	0.5		880	300
±3234 (±330)	0.35	8.3	740	250
	0.4		780	300
	0.5		840	300
±3528 (±360)	0.35	9.0	710	250
	0.4		750	
	0.5		810	
±3822 (±390)	0.35	9.8	680	200
	0.4		720	250
	0.5		780	250
±4116 (±420)	0.35	10.5	660	200
	0.4		690	250
	0.5		760	250
±4410 (±450)	0.35	11.3	630	200
	0.4		670	250
	0.5		730	250
±4704 (±480)	0.35	12.0	610	200
	0.4		640	250
	0.5		710	250
±4998 (±510)	0.35	12.8	590	200
	0.4		620	250
	0.5		690	250
±5292 (±540)	0.35	13.5	580	200
	0.4		610	
	0.5		670	
±5586 (±570)	0.35	14.3	560	200
	0.4		590	
	0.5		650	
±5880 (±600)	0.35	15.0	550	200
	0.4		580	

## 【解説】

## (1) 標準構法

波板ぶき屋根は、一般に縦重ねを2山半とすることが多いので、本構法標準でも2.5山重ねを標準構法とした。このほかに、図 3.3.21に示すように重ね部分をはぜ締めとするものがあるが、この場合ははぜの両隣の山を固定ボルト留めとし、他は本構法標準の定めに基づけばよい。

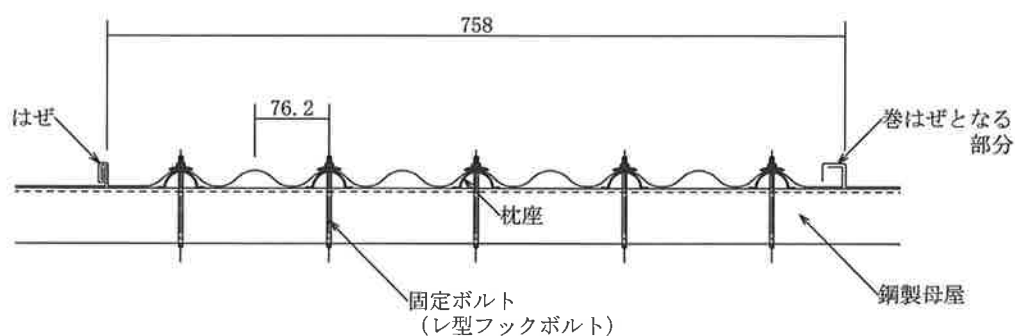


図 3.3.21 大波はぜぶきの例

## (2) 標準仕様

波板ぶきは、瓦棒ぶきや立平ぶきと異なり、波板自体がかなりの曲げ剛性を持ち、屋根としての強度部材を兼ねている。

表 3.3.14 に示す許容母屋間隔と軒出の許容長さは、「長尺亜鉛鉄板ぶき屋根工法基準仕様書（亜鉛鉄板会 編）」に基づいて定めた。

固定ボルトはいろいろな種類のものが用いられている。このうちパイプボルトは非常に弱いので、極力使用は避けなければならない。やむを得ずパイプボルトを用いる場合には、軒部分やけらば部分等の要所をUボルト留めとする等の配慮が必要である。フックボルトを板厚の小さい形鋼のリップに掛ける場合は、リップが曲げ起こされて、フックボルトが外れることがあるので注意しなければならない。